眠り姫と鉄板王子

緋汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
眠り姫と鉄板王子

【Ｎコード】
Ｎ０３４１Ｏ

【作者名】
緋汐

【あらすじ】
「怠け姫」――――通称「眠り姫」と呼ばれる睡眠大好きな彼女は結婚適齢期に嫁き遅れた噂の２４歳王女さま。それが親馬鹿王の策略とも知らず穏やかに過ごしていたはずの日常は今更の婚姻話で崩された。まぁいいかとご自慢の暢気さと無頓着さと眠気で向かったラトヴァゼニァ。お相手は民が実に上手く表現した「鉄板王子」だった。――――――本来家族団欒コメディだったのですが作者の飽き性問題により１８０度内容転換。「次期国王花嫁～巻き込まれ話」と同じ世界観設定です。が一切関わりありません。気が向い

たら関わらせます。――――――

これが噂の政略結婚。（前書き）

政略結婚大好物です。

著作権は作者にあります。また、アドバイス・誤字脱字などありましたら
ご指摘頂けると嬉しいです。

これが噂の政略結婚。

ある国のある城のあるところに、ある意味で有名な姫がいました。
大変美しく、儚げな印象を与えながらも凛とした立ち住まいは老若男女問わず見る者の目を奪い感心させるのですが、
彼女はそう。眠り姫だったのです。
いえ訂正しましょう。
彼女は常に眠いと訴える、三度の飯より・・・三つの宝石よりも眠りたい、
つまりは怠け者でした。
しかし俗世はそのまま「怠け姫」と呼び名を付ける訳にもいかず、
（仮にも王族なので）
少々和らげた某御伽噺を掛けてメルヘンチックも混ぜた「眠り姫」という呼び名で落ち着いたのでした。
第一継承権は彼女の二つしたの王子。そこまでは良いのですが、彼女の六つ下の次女が第二継承権を持ち、肝心の長女は第三であるというのは周知の事実で、やはり俗世では「怠け姫」――――――基「眠り姫」である事が原因ではないかと専らの噂でした。
そう、だからこそ彼女は「ある意味」有名であったのです。
ひと時はその見た目の美しさ、――――清々しい美しさです。嫌味がありません。――――から「夜の女神」だと大人気であったのが遠い昔の様でした。
手入れされた長く艶めく黒髪を夜空、大きく開いた美しい金の瞳は満月と、
例えを聞いて本人は鼻で笑ったそうです。
そうして離宮で充実した眠りの日々を繰り返し婚期もとっくに過ぎた２４の姫に舞い降りてきた話は。
まさかの婚姻話でした。

「姫さま、姫さま、・・・・・、っスィウィン様っ！　起きて下さい、お食事の時間ですよ！」
「んぁ・・・、昨日は夜更かししたから・・・あと、ちょっと・・・」
「嘘を仰らないで下さい！　姫さまが睡眠時間を削ってまで夜遅く起きていらっしゃる事がある訳ないでしょう！」
「・・・・・・。」
本人反論のしようが無い理由（わけ）を言われ、眠り姫はやっとこさ身を起こし――――ベットから落ちました。
「ああ、もう！　姫さまは寝相が悪いんですから、起きる時は御自分がどの位置にいらっしゃるかを御確認なさってからにして下さいと・・・何度申し上げれば良いのですか！」
長年仕え、眠り姫と同い年であり乳姉妹（きょうだい）であり侍女であり友人であり幼馴染である彼女――ティア――は手馴れた様子で布団のみ整頓します。主放置です。
「ティア・・、何か言葉遣い変・・・。気色悪いよ・・」
「姫さまを起こす時は声が自然と大きくなりますから、誰に聞こえても良い様にと私の知恵を絞った対策ですわ！」
そんなことを言っても肝心の内容が駄目なのだという事に本人は気が付きません。
「はい、姫さま！　御髪を整えますよ、こちらに座ってください。」
髪を弄られている間、眠り姫が船を漕がないようになったのは彼女の努力の成果です。尤も、叱っただけですが。
眠り姫の美しき「夜空」は、全く関心の無い姫を無理矢理弄った彼女の腕の賜物です。
ついでに言うと、彼女ティアは結婚適齢期をとっくに過ぎた眠り姫と違い既に一児の母です。その乗り遅れた本人の前で夫自慢と子自

慢と、惚気を堂々と話す兵(つわもの)です。眠り姫半分聞いていませんでしたが。
「ああ、そうでしたスィウィン。今日の昼頃、王の間へいらっしゃるようにと陛下がおっしゃってましたよ。昨晩急に言伝で・・・」
「父様が？」
「そう。だから今日はドレスを着ましょうね！」
輝くティアの顔と反対に、姫の顔は大層憂鬱そうであったとか。

そして約束の昼に、ティアによって散々着飾られた眠り姫は王の間で頭をゆったりと下げていました。勿論長年仕えた侍女が選んだだけあり、淡い紫のドレスは白い肌を際立たせ、儚げな印象と艶めく黒髪を上手く利用して大変気品溢れて・・・見えました。
「久しいな、スィウィン。元気そうで安心したぞ。・・・今日も半目だが。」
言い忘れましたが姫――王女は、眠気の為か一日の八割が半目の状態です。折角の美しい満月を見る者は殆ど居ません。
「スィウィン、今日はね知らせなければいけないことがあるの。落ち着いてね。」
王の隣で母である王妃が言葉を発します。
「実はな、スィウィン。お前の結婚が決まった。相手は、ラトヴァゼニァの第二王子だ。あの国の長男は既に結婚しているし、三男は婚約者が居るしな。まあそんな理由で第二王子だが、婚姻式は来月になってしまった。・・・すまないが、スィウィン。直ぐに向こうの国へ行って式の準備の為嫁いで欲しいのだ。」
王の願い即ちそれ命令。もう決定事項です。暗に今すぐ出て行けということ。
さすがの眠り姫も一瞬固まりましたが動揺はそれだけで、
「承知しました。直ぐに準備をして、明日にでも発ちたいと思います。」

くるりと踵を返しました。

姫が出て行った後、近衛を下がらせ王と王妃だけになった王の間での二人の会話。

「ぅ・・っ、ううっ、どうしようマリー。スィウィン、俺の事嫌いになっちゃったかなァ・・・」

「大丈夫よジョエル。よくスィウィンを嫁がす決心をしたわね、偉いわ。婚約者も作らず婚姻話も全て蹴って今まで頑張ってきたけれど・・・さすがに国家間の話では無理だったものね。頑張ったわ。」

スィウィンが適齢期に嫁き遅れた理由は隠れ親馬鹿の王のせいでした。

「本当に・・・、娘だけはどの野郎にもやらないって決めてたのに・・・。マウル（次女）はあの近衛隊長といつの間にか恋仲になって婚約までしてるしさ・・、せめて長女だけはと・・・」

「相手があのラトヴァゼニァですもの。強国よ。話を持ち掛けられたら断れないわ。・・・それにしても、何でウチの国――――――サラザモーラなのかしら。」

「あの国確か、良い鉄が少なかったからだよ・・・」

「成る程ねえ。スィウィンはちょっと（どころか大変）抜けた所と変わった所があるけど・・、意外と強いもの。大丈夫よ。」

あと国に対して無頓着だし。という言葉を王妃はギリギリの所で飲み込みます。

「そうだね・・。ああ、俺の愛娘・・・が、野郎の手に・・・」

涙を流しながら王は王妃の膝枕で眠りました。

素の状態（王実はヘタレ）に成るのは、互いに二人っきりの時だけでした。

いくら親馬鹿といえどジョエルは王族であり、王です。その立場としての頑張りをマリーはひっそりと褒めるのでした。

・・・という事が起きてるのも知らず当の本人はラトヴァゼニァには気持ちの良いベットはあるのかと、ティアを留まらせるのにどう説得しようとそればかり考えていました。

要するに鉄仮面な訳で。

ガタンゴトンと揺れる豪華な馬車で眠り姫は一人お気に入りの枕を抱えていました。
騒いで騒いで連れてけと喚くティアに「夫と子供（しかもまだ４歳）を置いて他国へ行くの？」と思っていた疑問を姫が口に出すと彼女は涙目のまま――というか号泣しながら母国へ残ったのでした。
ティア問題を片付ければ軽いもので、元々少ない荷物は父と母から貰った首飾りとティアから貰ったお揃いの髪留めでした。あと、ティアに無理矢理入れられた例の紫のドレスも。
そうそして。
「・・・、あの。」
「、はい？」
本来王族と気安く言葉を交わすことは出来ないのですが、眠り姫をサラザモーラの国境まで来たラトヴァゼニァの迎えのものは到頭我慢できないとでも言うように声を出しました。
「その、枕は何でしょうか。」
「私の相棒です。」
「そ、そうですか・・・。失礼致しました。」
姫の噂を少々聞いていた彼は「これが眠り姫か」と納得したそうです。あとは後（のち）に「変わった御方だった」と語ったそうだとか。
普通ならまず無理であろう馬車内でたっぷりと睡眠を捕った姫はすっきりしたまま民の歓声を受けて城へ入りました。何せ気持ち良く寝た後ですから、珍しく目はきちんと開いていた為ラトヴァゼニァの民は「美しく儚げで・・なんと立派な姫だろう」と感心したそうです。大変な誤解だと気付かずに。

「お初にお目にかかります、スィウィン・ピエア・サラザモーラでございます。ラトヴァゼニァ王。」
此処で一般であるなら相手を褒めたりする文句を少々付け加えるものですが、眠り姫の中には残念ながら褒めるという選択肢がありません。というかその為に良い点を探すもしくは偽るのが面倒くさいのです。
ティアが最後に泣きながら選んだ黄色のドレスは姫の瞳に合っており、黒髪が流れそれだけ見ればサラザモーラの民が示したようにまるで夜のようでした。
綺麗に腰を折ったその姿に近衛の者は密かに息を漏らし感心したのですが、さすがは王だけあって噂を拾い集めている。「眠り姫」の事をよく知っているようにそのまま挨拶を受け流しました。
「長旅ご苦労であった、サラザモーラの姫よ。いや、「夜の女神」「眠り姫」どちらかでも呼ぼうか。これからは我がラトヴァゼニァの一つとなり、尽くしてくれ。」
「はい。勿論でございます。」
眠り姫は眠り姫でも王族でだけあって公式の場では立派でした。ええ、公式の場では。
「では息子を紹介しよう。ラトヴァゼニァ次男王位第二継承権所持者。スィウィン殿の一つ年下となる。エドラ・コルー・ラトヴァゼニァだ。・・・入れ。」
入ってきたのは丈夫な布に体を纏わせた眉を寄せた男性。つかつかと一定の足取りで眠り姫の隣に並ぶと、まるで機械のような動作で腰を下ろし頭を下げました。
「参りました、父上。」
「エドラ。隣に居るのがお前の妻となる者・・・サラザモーラの姫だ。」
「スィウィン・ピエア・サラザモーラで御座います、以後お見知りおきをエドラ様。」
形式だけ優雅に腰を折った姫は既に半目状態です。今日はよく喋ら

なければいけない日だ、あぁ眠いと考えているなど誰も知る由もありません。
「エドラ・コルー・ラトヴァゼニァ。」
名だけ簡潔に告げた彼はそう。

噂の「鉄板王子」でした。

聡明な賢い第一王子に次いで生まれたのもまた王子でした。
実に愛らしく愛想の良い第二王子は幼少期、城に仕える者達の微笑みを誘い噂が噂を呼んで殆どアイドルの様にそれはそれはもう人気で皆に可愛がられていました。
そうして真っ直ぐに兄を支えながら生きてきた彼は誰もがいい子に育つよと口にした話題を見事に裏切り何処で道を間違ったか、何処で捻くれそう成ってしまったのか、超がつく無愛想の堅物に育ってました。
常に眉を寄せ難しそうに不機嫌そうにしており、淡々と稽古を習い体を鍛え国政を学び、規則や常識というものを嫌という程身に染み込ませておりました。
王族や身分の高い家の男児は下手に女人に惑わさられない様にある程度成長したら決まり事として女に慣らされる為、女性と全く経験が無いという訳では無いのですがそういった面でも全く噂も立たず本人も淡々と・・、本当に淡々と同じ毎日を繰り返して居り一時は男色家であると噂された程です。
そうして呼ばれたのが「堅物王子」。
・・・では直球過ぎる為、（仮にも王族）
民によって呼ばれた名が「鉄板王子」。
つまりは鉄板の様に硬い（堅い）という事。
本人はそれを聞いても全く反応を示さなかったとか。

そうして「怠け姫（ねむりひめ）」と「堅物王子（てっぱんおうじ）」は初めて会ったそうで。

二人で話してきたらどうだと言われ眠り姫の希望で二人が向かったのは姫の部屋でした。
普通は庭ではないのかと疑問を抱きつつ部屋へと入るも真っ直ぐベットへ腰を掛けた姫にさすがに王子は戸惑いました。・・そうです、王子彼。顔に表情が出ないというか表情が変わらないだけで中身結構なテンパリです。誰も気付きませんが。
初夜を早めるのか？　と疑問に思い取り合えず近くにあった椅子に腰掛けます。勿論眉を寄せた表情は変わらず。
「・・サラザモーレの姫。明後日の婚姻の事だが・・・」
捻って何とか話題を出した王子の努力の結果。簡単に言えば姫は話を遮りました。言ってしまえば彼女、正直婚姻云々はどうでもいいそうで。半目が限界の様です。
王族の話を遮るという事は普段あり得ない為王子は一瞬唖然としたものの、怒りを感じ堅物っぷりを発揮つまりは文句という名の説教をしようとしました。
が。
姫の遮った内容を理解してまた直ぐに唖然としました。
「うぁ・・？　聞こえなかったの？　一緒に寝よう？」
まあ当然です。中身テンパリはテンパリだけあってそうとうテンパリました。（内面だけ。外面眉寄せたまま表情変わらず）しかし姫にとって母国ではティアでも誰でも（大抵侍女）必ず一緒に寝ていた為、違和感を感じません。今まで通り言っただけです。
何だ？　誘っているのだろうか？　しかしまだ夜にもなってない上に自分たちはさっき会ったばかりだぞ？　意図が全く理解出来ない。

混乱したまま動かずにいる王子に姫は苛立ちを感じ、眠気の限界の為無理矢理立ち上がって王子の腕を引っ張りました。
不意を突かれた王子はそのままグラつき、えぇまあ。体重が傾いてベットへと倒れこんだ訳ですね。そうすると必然的に王子が姫を押し倒す形と成り珍しく王子の眉間の皺が増えました（更に）。
当の押し倒された状態の姫は焦る訳でもなく、寝転がれた事に満足そうに微笑みもう一度王子の腕を引っ張ります。
とすん、と横向きに寝転がる体勢となった王子は未だに戸惑ったまま自分の方へ顔を向けて丸まる眠り姫を見ました。そんな王子の視線に気付くことなく姫は微笑んだまま金の瞳を閉じ、そして――――

――――――――眠りました。気持ち良さそうに。

・・・完全に誤解していた王子を残して。

暫し状況が理解出来ぬまま唖然としていた王子もやがて何かを悟ったように上を向き体の力を抜いて、また同じように眠りました。

後に夕食の知らせに部屋を伺った女官は、
正装の服を皺くちゃにして眠る二人に大層驚いたそうです。

要するに鉄仮面な訳で。（後書き）

一話で書き忘れましたが、あらすじに書いてある通り
「次期国王花嫁～巻き込まれ話」と同じ世界観です。

同じ世界のそこら辺でアカシェが巻き込まれてると思ってて下さい。

妻の不満と夫の苦悩。（前書き）

載っていた（仮）番外編は予告（？）通り跡形も無く消えました。消しました。

妻の不満と夫の苦悩。

婚姻式を挙げてから七日経ちました。終始半目どころかほぼ目を閉じていた眠り姫は最高に不機嫌であったのですが、やはり公式の場でボロは出ませんでした。そういう所だけ要領が良いです。
婚姻式はというと
拍手する国民と
視界が狭くなった眠り姫と
無表情のまま淡々としていた鉄板王子と。
周りのムードに反した二人が延々と祝いの言葉を贈られるだけだったので割愛します。

さて七日も経つと騒がしかった周りも流石に少しずつ元に戻り始めます。
その事実に大変満足している眠り姫でありましたが、一つだけ不満がありました。
いえ、第一王子の奥方であるクェヴィ様とのお付き合いの問題ではありません。その辺は上手くやってます。
いえ、新しい侍女に問題がある訳ではありません。ティアと違って素を見せられないので一人にして欲しいというスィウィンの願いを彼女たちは渋りながらも聞き入れてくれます。
いえ、新しい生活、文化の違いなどでもありません。何せ無頓着で彼女は眠りさえ出来れば何処であっても良いのですから。
いえ、この国の事を常識程度に学ぶ授業でも無いのです。第一王女として幼少期より相当なスパルタで知識を叩き込まれたモノよりは遥かに楽でありますから。
――――――――ほぅら、また今夜も「不満」の元凶がやってきま

す。
「・・起きているか？　スィウィン殿。」
そうです。
眠り姫の唯一にして最大の不満はついこの前出来たばかりの夫にありました。
正直に眠り姫の心情を表しましょう。
【邪魔】の一言です。
何故この人は毎夜私の所へやってくるのだろう・・。常識というものに欠いているのだろうか。遠慮という言葉を知らないのだろうか。人が寝ていたら普通は遠慮するものではないのか？　遠慮して用件は明日の朝にしようと思わないのだろうか。そもそも毎夜やってくる程の用件とは何なのだ。大した事も言わずに去っていくではないか。意味が分からない。言いづらいのか。そういえばラトヴァゼニァは一夫多妻制が認められていたな・・・。その事なら全く、本当に全く構わないから放って置いて欲しいのだが。
取りあえずは眠りの【邪魔】をしないで頂きたい。
ティアであればきっぱりはっきりと言っている一言も、一応此処は他国であり、嫁いだのだという認識が眠り姫に「躊躇」という言葉を与えます。
珍しいです。
仕方ないので彼女はゆっくりと起き上がりました。
「・・・・・・・・、どうしました、エドラ様。」
改めて言いましょう。
眠り姫は見た目だけで言えば極上です。
寝ていた為緩やかについた寝癖も眠たそうに小首を傾げた姿も。
全て魅力的に見えてしまうのですから何と羨ましい効果でしょう。
加えて生き生きと侍女が選んだ寝巻きは無駄に薄く、体のラインが僅かに見え、肌の露出も多めのものでした。あからさまな意図が含まれたその選択も眠り姫は眠れれば何でも良いと疑うことも無く身に着けているのです。

まぁ、本人の意思関係無くその姿は大変色っぽいのです。
鉄板王子からしたらいい迷惑でした。

一方の鉄板王子。
それはそれはもう悩んでいました。
別に彼としては眠り姫の元へと通いたい訳ではなかったのですが、何せこれは国を跨いだ婚姻。
全く行き来が無いと噂になれば色々と不味いのです。
夜に男性が女性の元へ訪れる（それも夫婦）その意味も、姫となれば分かるだろうと思ったまま初夜を迎えたのですが、肝心の眠り姫は一瞬驚いた後すぐに鉄板王子の腕を掴みまた同じようにベットへと引きずり込み、何事も無かったの様にすやすやと眠り始めたのです。
その時の彼の気持ちを考えてあげてください。
それが何度行っても同じな上、回を重ねる毎に姫の顔が迷惑そうに歪むのです。
これは、もう行かないほうが良いのだろうか。
しかしまあ国を跨いだ（略）。ですから不仲は良くないのです。
・・・鉄板王子は、国想いでした。

そして七日目。
日に日に大胆に成っていく、恐らく侍女の心遣いであろう彼女の寝巻きは一段とアレでした。
思わず目を逸らします。ああ、ありがた迷惑。
隣に新婚の妻が寝て（もう一度言いますが見た目極上）同じように大人しく寝ていた彼は頑張ってました。健闘してました、理性と。
「・・・・・・・・、どうしました、エドラ様。」
問いかける彼女に流石の鉄板王子も折れました。限界でした。感情

の制御も、彼女の前だと無駄な様です。
思わずしゃがみ込み、溜め息を吐いて口元を押さえます。
心配したのか不審に思ったのか。
眠り姫が立ち上がり近づいて来ました。
あああ、出来れば座ったままで居て欲しかった。ひらひらと揺れる薄い寝巻きから、僅かに脚のラインが見えてしまうから。
心の叫びが届くはずもありません。
「どうしました、大丈夫ですか。エドラ様？」
目の前に膝を着かれても際どいので目を逸らします。逸らさせて下さい。
「口？　お口がどうかなさったのですか。」
手を添えられ口元から外されます。
別に何でも無いのですが、無意識のうちに唇を噛んでいたようです。
涙が出ます。
「あら、血が出ているではありませんか。どうして傷になるまで噛んだのです、」
阿呆ですか。
ティアであれば彼女の口からその言葉は出ています。
まさか元凶が自分だと思う筈もありません、眠り姫。
眠り姫としては考えました。考えたつもりでした。ですが彼女の「ひらめき」は少々変わった環境で育った為か少し異質でした。
「ああ、そうでした。こういう傷はですねエドラ様――――――、」

――――――――――――――――――――ペロリ、

「・・・舐めとけば治るんですよ。」

そんな馬鹿な。

・・・誰か鉄板王子を助けてあげて下さい。

妻の不満と夫の苦悩。（後書き）

どこまでがＲ１５でしょう・・・

変わり者が二人。（前書き）

短いかなあ。

変わり者が二人。

哀れです。哀れですね鉄板王子。

固まるのも無理はない。彼は今理性をフル回転させて色々闘っています、脳内で。
もういっそ押し倒しちゃえばいいのにね。

硬直した目の前の（一応）旦那を最初は不思議そうに覗き込んでいた眠り姫ですが、時が経つごとに機嫌が悪くなってきました。
何せ鉄板王子はいくら声を掛けても微動だにしないのですから。
まあ、無視されてるというよりは正確には何も耳に入っていないのでしょうね王子。

そこで眠り姫は何を思ったかすっと屈んでいた姿勢を正し
立ち上がり
踵を返し
鉄板（だんな）王子放置したまま
ベットに入ってしまいました。

やっと本能に打ち勝った（英雄）王子は現状に気付き、心の中は大嵐。というか大文句。
ええええええええええええ。
無理は無いです。姫、戻ってきてあげて。

王子は混乱したまま考えました。
（あ・・・え・・？　も、戻ってしまった・・。何かしただろうか・

・。）
（これが巷の本に載っていた、所謂「放置プレイ」なのか。）
王子、最後のは余計な知識です。

仕方なく、このまますごすご自室に戻る訳にはいかないので眠り姫の眠るベットへ、姫の隣へ体を滑り込ませました。ヘタレ？　・・・いえいえ違います違うはずです。
そこで王子は髪を散らばらせて丸まって眠る姫を、自分の奥さんを初めてまともに見ました。
今まで見てなかったんですねこの人何やってんでしょう。
そこで鉄板王子は衝撃の事実に、・・・いえ、事実というよりは衝撃の自分の心に気付きました。

（・・・可愛い。）

惚気ですか、
とは言わないであげてください。
鉄板王子は自分が思った事に顔を僅かに赤らめました。
ああ、惜しいことです。この瞬間を誰も見ていないとは。
それは、鉄板が初めて熱で溶かされかける瞬間だったのです。

鉄板王子がベットに入り眠った後、寝ていたはずの姫の瞼がゆっくりと開かれました。
ええ、彼女寝てませんでした。
これは実は凄いこと（ティアが見たら間違いなく日記におさめるのでしょう）なのですが、まあ元々眠り姫は外面の要領だけは良いです。殆ど反射で出来ています。

その反射で異国の（仮にも）王子である夫を完全に無視して眠りにつくのはどうなのだろうという考えに至り、結果寝たふりをしていました。
こちらに顔を向けて眠る王子をじっと見つめます。
（初めて・・・まともに見た気がする・・・）
何やってんだあんたら。
って話ですね。
起きていたら絶対に無礼にあたり出来ないので、今のうちにと眠り姫は鉄板王子を遠慮なくじっと観察します。
言わせてもらうと王子様＝イケメンがこの世で成り立ったなら誰も苦労はしませんね。
鉄板王子、顔で言うと可も無く不可もなく。
幼少期はアイドルだったので、笑えばそれなりに人を魅了するものの、どこで育て方を間違えたのか現状を見ると只の無愛想です。
そうです、只の無愛想なんです。
寝てるときも無愛想なんです。
本当に無愛想で、特に良い部分など見つかりやしないんです。（↑失礼、そしてしつこい）

それを眠り姫、
ああ、眠り姫だからこそでしょうか。彼女のみの感想なのか。
恐らく眠り姫は確実に何処か人とずれているのでしょう。
王子をじっと観察した後、姫はある事に気付き心で呟きました。

（・・・可愛い。）

せめて格好良いと言ってあげて。

それは夫婦間に変化を齎す事実にそれぞれが気付いた夜でした。

変わり者が二人。（後書き）

まあ王子のはつまりアレです。
「俺の嫁可愛くね？」です。畜生め。

眠り姫の（多分）冒険。（前書き）

期末という名の大敵を倒し終えました。

眠り姫の（多分）冒険。

暇でした。なんかもうこんなに暇で良いのかという位には暇でした。
眠り姫が沢山寝たからもういいと言う位には
時間は有り余っていました。
よく考えれば当然です。
彼女の夫は第一王子な訳でもなく、第一王子の妃ならばまだやる事
があるものの、
第二王子の奥さんは大抵丸一日暇でした。
一般的には、趣味などで時間を潰すものですが。

ですからちょっとした出来心というか。
ある意味至極当然な思考回路というか。

「・・・うん、外出てみよう・・・。」
眠り姫の呟きは、たった一人の広い部屋に響きました。

普段侍女に控えて貰っていたのが幸いしました。
「えと・・・、服は・・・」
ごそごそと衣装棚を漁ります。手際良いです、覚えてたんですか姫。
「つぎ・・・は、靴・・と。」
そうですね。すごいです上手ですよ（赤子）。
「髪・・・は・・・、」
おっと。髪の毛だけ上手く出来ない様ですね。・・・。

・・・？　ひ、姫、あの。綺麗な髪がぐしゃぐしゃに・・・
「で、最後に帽子、と。」
・・・・・・・「帽子」？
結局出来なかった長い髪の毛は無理矢理上に上げて帽子の中に押し込んでました。
ちょっと待ってください、姫。

「よし、出来た・・・」
鏡を見つめる眠り姫の顔は所謂アレです。どや顔です。古いですか。
放って置いてください。
ていうか良くないです。全然良くないですから姫。
眠り姫はその格好でくるりと一回転しました。
可愛いですけどね？　姫、その格好を世では

「変装」っていうん、です、よ・・・・・・・・・

眠り姫を待っていたのは、知らなかった外での日常です。
彼女の頭の中にあるのは基本的に「睡眠」の二文字ですが、十分に欲しいものが与えられたらそりゃあ他の物事にも興味出てきます。
興味のある物事にはとことんです。とことんです。とことんなんです。
まあ、その「興味あるもの」が、滅多に無いのですが。
眠り姫と鉄板王子専用の離宮を離れ、城の中心へと向かいます。
しかし彼女が失念していたのは、城の広さです。

王宮だけで街二つ分位の面積はありますからね？
あとですね姫、草木の間を這って移動しないで下さい。そのお陰で見つかりませんが、完全に不審者ですよ。色々夢が壊れます。
「・・・・ぅ・・っ・・、つ、疲れた・・・・」
思いっきり息乱れてますよね。這うからです。這うからですよ。
パタリと倒れ、その場で一刻程眠ります。
寝れるんですか、仮にも姫なのに、すごいですね、・・は、今更です。
やがてムクリと起き上がった姫の顔は完全に寝起きです。半目です。
「・・・・・帰ろう・・・・」
・・・賢明だと思います。

しかし予想していなかったのは、帰宅（？）後です。
「・・・・・。」
姫、目を逸らさないで下さい。現実です。
離宮の周りには完全にパニック状態の侍女達と汗だく鉄板王子が姫を探しています。
幸い、大事にはまだなっていない様ですが、
それも時間の問題なので早く出て行った方が良いですよ。
恐る恐る茂みからゆっくり姿を現した姫を発見したのは、夫さまです。

「っ！　スィウィン・・・ッ！」

目を見開いた彼は、一目散に駆けて行き、彼女を抱きとめました。
「！　ぁ・・・っ、」
ぎゅうう、と力強く背中に腕が回されました。少し痛いくらいです。
「一体何処に・・・、誰かに連れ去られたのかと・・・！」
「あの」夜から、彼女を認識し、意識し、好意を持った鉄板王子は僅かながらも確かに眠り姫に淡い恋心を寄せていました。
すう、と姫は王子の匂いを嗅いで、汗だくになっているのを見ればどんなに鈍くとも
走り回って探してくれたのだと分かります。王族の第二王子だというのに。
「申し訳ありません・・エドラ様、その・・、ありがとうございます・・・」
「良い。ところで、一体何処に・・・。怪我は・・・？」
眠り姫を一旦放して彼女の姿を確認した鉄板王子は取りあえず固まりました。
「スィウィン殿・・・、その（土だらけの）肘と膝は・・・」
眠り姫も現状に固まります。少なくとも彼女、外面だけは良いのです。
「ええと、エドラ様、スィウィンと呼び捨てにして下さって構いませんわ。」
話題を逸らす方向ですか。
「そうですか。ところで、その格好は？・・・」
仮にも元一国の王女、第二王子の妻が街中の男の子の様な格好をしています。半ズボンです。王族は、ドレスは良いとしてそんな風にあまり肌を見せないんです。
「何故、手足に土が？　まさか誰かに何かされたとか・・・」
「ち、違います！　ええと、だからですね・・・！」

這うからです。這うからですよ、姫。

眠り姫の（多分）冒険。（後書き）

眠り姫の変装の格好イメージは、
『ｐａｎｄｏｒａ　ｈｅａｒｔｓ』の主人公、オズのアヴィスから
帰還後の
格好のイメージで。

・・・細かいですかね？

気付いた眠り姫。

――――――ああ、あの匂いだ。

眠り姫は（今日も）苦悩しながら大人しくベットに収まった夫に反応して、ぴくりと意識を浮上させました。眠り姫失踪事件（仮）の日の晩から、眠り姫は夫である鉄板王子が気になって仕方ありません。

そう、それは、何気ない時に思い出したのです。

ふと彼女が鉄板王子を部屋にいつものように迎え入れた際、彼女は鉄板王子から香った匂いに反応しました。ほんとうに、僅かな匂いです。

鉄板王子の汗の匂いでした。

・・・変態だとかは言わないであげてください。それから「臭い」だとは表記しないであげてください。

ええ、まあ、とにかく、何であるにしろ、彼女は夫の匂いを嗅ぐたびにどうしてか抱きしめられた時の事を思い出してしまうのです。その時の声だとか、表情だとか、肩にあった手の感触とか。

そうして、何故だかおかしくなってしまうのでした。

ああ、この人、本当に必死で探していたな、と。

同時にほんわりと胸の奥が暖かくなるのです。それは、とても心地の良いものでした。ですから眠り姫は自然と、毎晩何故か訪問してくる鉄板王子を疎ましく思わなくなったのです。大変な進歩です。

やったね王子。

・・・眠り姫は鉄板王子が寝入ったのを確認してから、自分が好きなその匂いをもっと感じようと、少しだけ体を鉄板王子の方へと近づけるのでした。

一方の鉄板王子、姫の変化に気付けばいいものを、全く気付きませんでした。進歩なし。

今日も理性を集合させて、彼女の部屋へ入室して、隣で目を閉じる彼女を確認して、眠りに落ちる寸前に思い出してしまうのです。

眠り姫が居ないと知った時の喪失感とか、見つけた時の喜びとか、抱きしめた肩の華奢さとか、柔らかさとか。

一瞬幸せになって、現状を思い出して再び悩みながら眠るのです。

上げて落とす、これぞ新たな手段です、姫！　・・・そんな事も知らぬ王子は今日も生真面目に生きるのです。

しかし転機はあっさりとやってきました。

眠りも飽きたと言える程時間が有り余ってしまっている眠り姫（これ相当）。

久々に勉強以外でも、読書をしようと試みました。

仕事を見つけた侍女はいそいそと眠り姫の下へ本を何冊か運びました。ありがとう、と言ってから眠り姫は再び一人になった部屋でパラパラとページを捲ります。

何冊か読み終わって満足し、次の本に手を伸ばしました。

その本の題名、『初夜について』。

・・・・・

ああ、余りに一生懸命で、気を遣った侍女の仕業でした。
勿論、侍女ですから、自分たちの主が未だ夫婦として完全に機能してはいないと知っています。
色々頑張ったのに（姫の寝巻きとか）全く効果は見られない。王子に働きかけても無駄だ、姫にアピールしようという決断です。
眠り姫の最初の反応は今まで通りでした。脳内は初夜ってなんだっけの文字。
公の場ではないのでゆっくりですが彼女が知識の箪笥を開けて思い出します。
幼少の頃とお年頃の時代の授業の記憶を見つけた時、彼女は硬直しました。

次いで、青ざめました。

何せ評価は悪いが外面は良い彼女、国を背負って嫁いで来て、しかも役目を果たしていないとは！
大変です。もっと言えば大変で済まされないです。

どうしようどうしようと駆けるような形で部屋中をぐるぐる回りま

した。
謝るべき？　何を？　の連続です。
この状況、一言で言えば、そう、姫、テンパってます。

しかし鉄板王子も初夜について特に触れなかったと思い出し、今度は落ち込み始めまして。
ああ、女性としての魅力に欠けるのだろうか、だなんて、そんなことありません、眠り姫。王子哀れすぎます。

鉄板王子が自分に魅力を感じないのならば、感じるように努力しよう！
・・・最終的に辿り着いたのはその答えでした。
いえ、あの、十分です、十分ですから、姫！

暴走し始めた眠り姫は鏡の前で自分で唇に紅を塗りました。色っぽく、色っぽく、挑むように鏡を見上げて。

この後更に待ち受ける苦難に、当の鉄板王子はこの時気付きもせず、
・・・真面目に働いていました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0341o/

眠り姫と鉄板王子

2011年12月18日00時50分発行